

## パウル・ティリッヒ研究 (IX)

—「生 (life)」について—

森 田 美千代

- I 問題の所在
- II ティリッヒにおける「生 (life)」
  - (i) 生の次元性
  - (ii) 生の曖昧性
  - (iii) 人間の生の自己実現
  - (iv) 道徳・文化・宗教
  - (v) 曖昧ならざる生の探究
- III 教育に示唆する諸点

### I 問題の所在

パウル・ティリッヒ (1886~1965) が発表したほぼ著作順に、これまで考察を進めてきた。今回は、「生 (life)」について、考察を深めたい。(しかし、最初に、ことわっておかなければならないことは、ティリッヒにおいては、「生 (life)」の問題と聖霊論とは相関の関係にあるのだが、今回は、ティリッヒの聖霊論には全然触れることができないということである。そのことを、最初にここでことわっておかなければならない。)

テキストを読む視点および本研究のねらいは、前回までと同様に、今回においても、(1)まずティリッヒの文脈に即して読み考えること、(2)人間の問題、教育の問題、キリスト教教育の問題へのティリッヒの貢献と示唆を掘り起こすこと、である。力点としては後者にある。

従って、パウル・ティリッヒ研究 (IX) においては、ティリッヒの「生 (life)」の分析を明らかにすることによって、人間の問題、教育の問題、キリスト教教育の問題において、少しでもみえてくる地平は何か、それを明ら

かにすることである、といえる。

テキストとしては、『組織神学 (Systematic Theology)』の第三巻(1963年)のパートIVの「生と霊 (Life and Spirit)」を主として使用する。

## II ティリッヒにおける「生 (life)」

### (I) 生の次元性 (the dimension of life)

ティリッヒは、あらゆる存在の生を、メタファーとして、表わす時、それを、次元 (dimension) と表現し、層 (level) とは表現しない。このことを、まず最初に指摘しておかなければならない。

では、なぜ、ティリッヒは、層 (level) というメタファーを使わないのであろうか。結論を先にいえば、それは、層というメタファーを使うと、あらゆる存在の生が、二元論ないし三元論になるか、つまり多元論になるか、(ここでいう二元論とか三元論とかは、層と層との間には何らの関連もなく、従って、有機的運動もなく、層と層とが横に並んだりあるいは上下に重なっていることを意味する。)あるいは、二元論ないしは三元論が、相互干渉を起こし、一挙にある層に還元化されて、一元論になってしまうからである。

例えば、層というメタファーを使えば、有機体と非有機体(無機物)との間には、何らの関連もなくなったり、あるいは、一挙にどちらかに還元されてしまったりすることになる。また、精神と肉体との間においても、然りである。精神と肉体との間には、何らの関連もなくなることになったり、あるいは、精神を肉体に還元してしまったり、肉体を精神に吸収してしまったりすることになる。さらに、文化と宗教との関係においても、然りである。文化と宗教とは無関係であるとするか、あるいは、宗教を文化に還元したり、文化を宗教に吸収したりすることになる。

ティリッヒは、層というメタファーを使うことによって生じる不適切さから免れるために、次元 (dimension) というメタファーを提起する。次元というメタファーを使う時、あらゆる存在の生は、相互に無関係な二元論ないし三元論になることを免れるし、また、相互干渉して一挙に支配したり吸収されたりして一元論になることも免れることができるのである。次元というメタファーを使うことによって、あらゆる存在の生は、その次元を保持したまま、かつ、次元間には関連性を見出すことができるのである。「それぞれの次元は、他を混乱せしめることなしに交わっている。それぞれの次元の

間には、矛盾はない。(All dimensions cross without disturbing each other; there is no conflict between dimensions.)<sup>(1)</sup>と、メタファーとしての次元を、ティリッヒは、このようにいう。(このようなことについては、ティリッヒ研究(VI) — 不安や病とその克服としての救いについて — においても、私は、すでに触れている。)<sup>(2)</sup>

あらゆる存在の生を次元的にとらえることによって、人間の問題、教育の問題、キリスト教教育の問題において、みえてくる新しい地平は何であろうか。このことについては、Ⅲで、考察することにする。

### (ii) 生の曖昧性 (the ambiguity of life)

ティリッヒは、生は曖昧であるという特徴をもつ、という。なぜ、生は、曖昧なのか。それは、彼によれば、次のようにいえるからである。(1)現実の生は、本質的要素と実存的要素との混合である。(Life is a mixture of essential and existential elements.) (Ap.12, A'p.13), (Ap.29, A'p.35) (2)現実の生は、可能的(潜在的)存在の現実化である。(Life is defined as the actualization of potential being.) (Ap.30, A'p.37)

前者について。本来的には、生は、本質的である(創造された善である)が、生が現実になると、その生は、本質を含みつつも、同時に、その本質から疎外された実存をも含むことになる。従って、現実の生は、本質と実存とが混ざり合っており、絶えず曖昧にならざるを得ないということになる。

後者について。ティリッヒによれば、可能性(潜在性)というのは、現実的となる力または動力をもった存在の種類である。(Potentiality is that kind of being which has the power, the dynamic, to become actual.) (Ap. 12, A'p.13) 従って、ある存在のある次元が現実となる可能性(潜在性)は、その存在はもっているのであるが、現実化する程度に応じて、その存在は、さまざまな存在のありようをもつことになる。ここに、その存在の生は、どうしても曖昧性をおびざるをえないことになるといえる。

### (iii) 人間の生の自己実現 (the self-actualization of human life)

生の曖昧性のところで、現実の生は可能的(潜在的)存在の現実化である、ということが明らかになった。可能的存在の現実化が起きる際、次の三つの機能において、おきる、とティリッヒは考えている。それは、生の自己統一

の機能 (the function of self-integration of human life), 生の自己創造の機能 (the function of self-creation of human life), 生の自己超越の機能 (the function of self-transcendence of human life) においてである。

それぞれの機能についてみていくまえに、次のことをおさえておきたい。それは、上のどの機能においても、その機能が生じる際には、自己同一 (self-identity), 自己変化 (self-alteration), 自己への帰還 (returning to one's self) のプロセスをとるということである。「可能性は、われわれが生と呼ぶところの過程の中で、これら三つの要素 (自己同一、自己変化、自己への帰還) を通してのみ、現実となる。(Potentiality becomes actuality only through these three elements in the process which we call life.)」 (Ap.30, A'p.37)

生の自己統一の機能について。ティリッヒは、本質的には、すべての生には中心がある、という。現実の生においては、その中心から、自己変化し、そして、ふたたび自己同一の中心へと帰還する。このように、中心性が実現される運動 (the movement in which centeredness is actualized) を、ティリッヒは、生の自己統一の機能と呼んでいる。自己統一においては、生の運動は、円環的運動 (circular movement) になり、そして、自己統一の機能を決定する原理は、中心性の原理 (the principle of centeredness) である。

生の自己創造の機能について。ティリッヒは、現実化の過程は、単に自己統一の機能、すなわち、中心から中心への生の循環運動のみを意味しているのではない (Ap.30, A'p.38)、といい、現実化の過程はまた、新しい中心を生産する機能 (the function of producing new centers)、すなわち、自己創造の機能をも含んでいる (Ap.30, A'p.38)、という。自己創造においては、可能的なものの現実化の運動、すなわち、生の運動は、水平的方向 (the horizontal direction) に進み、自己創造の機能を決定するものは、成長の原理 (the principle of growth) である。 (Ap.31, A'p.38)

生の自己超越の機能について。ティリッヒは、可能的なものの現実化する第三の方向は、円環的な方向と水平的な方向とは対照的な方向、すなわち、垂直的な方向 (the vertical direction) である (Ap.31, A'p.38)、といい、そして、これを、生の自己超越の機能と呼んでいる。自己超越の機能は、実際は、自己統一の機能においても、自己創造の機能においても、起きるのであるが、ここでいう自己超越は、偉大なもの、荘厳なもの、高いもの (the

great, the solemn, the high) へと、自己の限界を越えていくこと(つまり、自己を超越していくこと)を意味している。(Ap.31, A'p.39) この自己超越の機能を決定する原理は、ティリッヒによれば、昇華の原理 (the principle of sublimity) である。

上述のことを、ティリッヒは、次のように要約している。「われわれは、可能的なものの現実化、すなわち、生と呼ばれる過程の中で、生の三つの機能を区別する。それは、すなわち、中心性の原理の下における自己統一、成長の原理の下における自己創造、昇華の原理の下における自己超越である。(Within the process of actualization of the potential, which is called life, we distinguish the three functions of life : self-integration under the principle of centerdness, self-creation under the principle of growth, and self-transcendence under the principle of sublimity.)」(Ap.31~p.32, A'p.39)

私は、前に、生の自己統一の機能、生の自己創造の機能、生の自己超越の機能のいずれにおいても、完璧にはないが、自己同一から自己変化へ、そして、自己への帰還のプロセスをとる、ということ述べたが、現実の生においては、自己同一、自己変化、自己への帰還の結合 (unity) に曖昧さが生じる。その曖昧さの程度によって、自己統一 (self-integration) は自己崩壊 (self-disintegration) に、自己創造 (self-creation) は自己破壊 (self-destruction) に、自己超越 (self-transcendence) は世俗化と魔神化 (profanization and demonization) に、変化する。

現実においては、自己統一から自己崩壊にいたる、そのさまざまな程度において、自己創造から自己破壊にいたる、そのさまざまな程度において、自己超越から世俗化や魔神化にいたる、そのさまざまな程度において、生は機能しているといえるのである。

#### (IV) 道徳・文化・宗教

人間の生の自己統一の機能は、精神の次元でいえば、道徳の行為とすることができ。人間は、本質的には、完全な中心性 (complete centeredness) が与えられている。従って、人間は、現実においても、完全な中心性を実現しようとする。人間が本質的な中心性を実現しようとするその行為が、道徳的行為である (The act in which man actualizes his essential centerdness is the moral act.) (Ap.38, A'p.47)、とティリッヒはいう。従って、彼に

においては、道徳的行為は、ある神的あるいは人間的法が遵守される行為ではなく、生が、精神の次元において、生自らを統合する行為である。(A moral act is not an act in which some divine or human law is obeyed but an act in which life integrates itself in the dimension of spirit.) (Ap.38, A'p.47) さらに、道徳は、中心性をもった自己が、自らを、人格として成り立たせる生の機能である。(Morality is the function of life in which the centered self constitutes itself as a person.) (Ap.38, A'p.48)

つまり、ティリッヒにおいては、道徳とは、第一に、自己の中心性を実現しようとする行為であること、第二に、そのことによって、(つまり、自己の中心性を実現しようとすることによって、) 人格を成り立たせる行為であること、といえる。

次に、人間の生の自己創造の機能は、精神の次元でいえば、文化の営みといえることができる。ティリッヒによれば、文化とは、次のようなことを指す。「文化とは、何かを配慮し、その何かを生き生きとさせ、その何かを成長させることである。このようにして、人は、その人が出会うすべてのものを耕すことができ、そして、その耕作物から新しい何かを創造する。例えば、物質的に、受容的に、反応的にである。これらの三つの場合のそれぞれにおいて、文化は、遭遇した実在を越えて、新しい何かを創造する。(Culture is that which takes care of something, keeps it alive, and makes it grow. In this way, man can cultivate everything he encounters and he creates something new from it-materially, receptively and reactively. In each of these three cases, culture creates something new beyond the encountered reality.)」(Ap.57, A'p.72) そのことによって、つまり、遭遇した実在を、何か新しいものへと創造する(新しい form を創造する) ことによって、自己も新しい中心性を新しく創造する。

つまり、ティリッヒにおいては、文化とは、新しい中心性を実現すること、および、新しい form を創造することである、といえる。

第三に、人間の生の自己超越の機能は、精神の次元でいえば、宗教の機能である、といえる。生は、垂直の方向において、究極的および無限の存在へと、奮闘している(Life is striving in the vertical direction toward ultimate and infinite being.) (Ap.86, A'p.109)、といえることができる。

前にみたように、生は曖昧であるからして、中心性(centeredness)・統

合性 (integration) を実現しようとする行為すなわち道徳においても、新しい中心 (new center) ・新しい形式 (new form) を実現しようとする行為すなわち文化においても、自己を超越しようとする行為 (transcendence) すなわち宗教においても、それぞれの実現のありようには曖昧さがある。

また、道徳と文化と宗教は、本来的には、お互いに浸透しあっている。それぞれは、見分けられるが、切り離すことはできない。文化は、道徳に、内容となるものを、提供する。そして、道徳的自我の成立なしには、宗教は、生じない。さらに、その宗教は、文化の中でしかフォームをとりえない。(Morality, culture and religion interpenetrate one another in their essential nature. They are distinguishable but not separable. Culture provides the contents of morality. Without the moral self there is no self-transcendence, religion. And this self-transcendence, religion can not take form except within the cultural act.) (Ap.95, A'p.120)

けれども、生は、曖昧であるからして、現実の生においては、道徳と文化と宗教とのつながり性にも、曖昧さがあらわれる。

道徳・文化・宗教の、以上のような、現実的曖昧性は、人間の精神の次元においてそれらが再結合されることはどこまでいっても不可能であり、人間の精神の次元を越えた新しい実在 (the new reality) または聖霊 (the divine Spirit) によって、道徳・文化・宗教は、再結合 (reunion) されるのである。

(V) 曖昧ならざる生の探究 (the quest for unambiguous life)

(ii) において、現実の生は、本質的要素と実存的要素との混合であるからして、また、現実の生は、潜在的存在の現実化であるからして、現実の生は、曖昧性を免れえない、ということ述べた。

しかし、それと同時に、現実の生は、曖昧ならざる生を求めようとするのである。それは、生が自己超越の性格をもっているからである。そして、この自己超越が宗教である。従って、曖昧ならざる生の探究は、宗教において、まず生じる、といえる。けれども、生の自己超越は、それが超越する方向のものに、明瞭に到達するということは、決してない。(The self-transcendence of life never unambiguously reaches that toward which it transcends.) (Ap.107, A'p.136) 生は、生がその方へ動いていくもの、すなわち、無制約なるものに、到達することはない。それに到達はしないが、探究はとどまら

ない。(Life does not reach that toward which it moves, the unconditional. It does not reach it, but the quest remains.) (Ap.109, A'p.138) この探究に対する答えは、啓示と救いの経験である。(The answer to this quest is the experience of revelation and salvation.) (Ap.109, A'p.138)

ティリッヒは、以上のように、生は曖昧であるが、しかし、人間は曖昧ならざる生を求めるものである、しかし、人間の側から探究していても、曖昧ならざる生を実現することはできない、しかし、探究し続けている時に、時として、啓示と救いにおいて、曖昧ならざる生が、向こう側から与えられる経験をすることがある、といっているといえると思う。

曖昧ならざる生を探究しようとする時、すなわち、自己超越しようとする時、その障害となるものを、ここでとりあげておきたい。それは、世俗化と魔神化とである。

世俗化 (profanization) とは、ティリッヒによれば、holy に対立して、自己超越を阻止することである。(Ap.87, A'p.110) ティリッヒは、ヒューマニズムが、生の自己超越的機能を無視し、自己創造的機能を絶対化する限りにおいて、そのようなヒューマニズムも、世俗化の機能を果たしている、とみなす。

魔神化 (demonization) とは、いわゆる偶像崇拜であり、ティリッヒによれば、何か制約されたものを無制約的妥当性にまで高めようとする働きである (the demonic elevation of something conditional to unconditional vality) (Ap.98, A'p.124)、と説明したり、あるいは、「魔神的なものは、神聖性の特殊な担い手と神聖なものそれ自体とを、同一視することによって、自己超越を、歪曲する。この意味において、すべての多神教的な神々は、魔神的である。何か有限であるものが、無限性または神的偉大性を主張することは、魔神的なものの特徴である。(The demonic distorts self-transcendence by identifying a particular bearer of holiness with the holy itself. In this sense all polytheistic gods are demonic. The claim of something finite to infinity or to divine greatness is the characteristic of the demonic.)」(Ap.102, A'p.129) とも、説明する。

自己超越の際、以上のような、世俗化や魔神化のために、自己超越は、絶えず曖昧性においてしか、超越をなしえない。



### Ⅲ 教育に示唆する諸点

これまで、ティリッヒの「生 (life)」の分析を明らかにしてきたが、ここで、ティリッヒの「生」の分析から、人間の問題、教育の問題、キリスト教教育の問題において、示唆を受ける諸点を考えてみたい。

第一に、存在の生とりわけ人間存在の生を、層というメタファーによってとらえるのではなく、次元というメタファーによってとらえることによって、人間の問題や教育の問題が、どのように豊かにとらえられるだろうか。

次元というメタファーによって人間をみることによって、人間の各次元—例えば、身体的次元、心理的次元、精神的次元—の間は、無関係ではなくて関連し合っていることが、明らかになった。さらに、身体的次元にすべての次元を還元したり、逆に、精神的次元に他のすべての次元を吸収したりすることはできず、各次元は、その次元としての独自性を保ちつつ、しかも他の次元と関連し合っていることが、明らかになった。人間を多元的存在とみることは、パウル・ティリッヒ研究 (VI) —不安や病とその克服としての救いについて—においてすでに明らかにしたように、特に、人間の病気を治療するにあたって、あるいは、カウンセリングをするにあたって、貴重な示唆を与えてくれることになる。つまり、治療やカウンセリングは、部分的治療 (ある次元だけを治療すること) では、治療の対象となる人間を、治すことはできにくい。治療やカウンセリングは、全体的治療 (身体的次元、心理的次元、精神的次元のすべての次元の関連性において、治療すること) でなければならないということが、人間を次元的にとらえるということから示唆される、といえよう。

第二に、人間存在の現実の生は、曖昧性をおびざるをえないが、それと同時に、人間存在の現実の生は、曖昧ならざる生を探究するものでもある。けれども、探究していても、こちら側 (人間の側) から、曖昧ならざる生を実現することはできず、曖昧ならざる生を探究していている時に、時として、向こう側から示されるという経験をすることがある。さらに、曖昧ならざる生を探究する時、その探究の障害となるものに、世俗化と魔神化を、ティリッヒはあげていたが、このようなことから、人間の問題や教育の問題やキリスト教教育の問題において、新しく見えてくるものには、どのようなことがあるか。

それは、曖昧ならざる生を探究することから眼をそらさせる世俗化 (ティ

リッヒは、例えば、ヒューマニズムも、世俗化のなかに入れていっている。)にも、また、曖昧ならざる生を魔神化によって歪曲して見出そうとすること(例えば、狂信、ドグマティズム、拝金主義、拝物主義、学歴主義、など)にも、教育とりわけキリスト教教育は、十分に警戒しなければならない、ということになる。

第三に、道徳・文化・宗教は、ティリッヒによれば、見分けられるが、切り離すことはできず、曖昧であるにしても、三者の間には関連性がある、ということがいえた。これは、ティリッヒの思想の大きな特徴のひとつである、といえる。このことから、みえてくることは、どのようなことであろうか。それは、文化や宗教と離れた道徳もなければ、道徳や宗教と無関係な文化もなければ、道徳や文化を離れた宗教もない、ということの確認であろう。このことは、ティリッヒの有名な命題ともいえる、「宗教は文化の実質であり、文化は宗教の形式である。(Religion is the substance of culture, culture is the form of religion.)」ということでもある。道徳の教育、文化の教育(いわゆる教育、狭くは授業)、宗教の教育は、一連のこととして、考えなければならないし、考えることができるのではないか、との示唆を与えられる。

ティリッヒの「生」の分析を手がかりとして、人間の問題、教育の問題、キリスト教教育の問題への、ティリッヒの貢献と示唆を、私は、以上のように考えた。

以上は、昭和60年の第28回教育哲学会全国大会で、パウル・ティリッヒ研究 (IX) — 「生 (life)」について — と題して口頭発表した原稿に、加筆したものである。

(注)

- (1) Paul Tillich, *Systematic Theology*, p.15 『組織神学 第三卷』 新教出版社 p. 17 この論文において、以後、この著作を引用する場合は、A (邦訳の場合はA') であらわすことにする。
- (2) Paul Tillich, "Die Bedeutung der Gesundheit," *Die Religiöse Substanz Der Kultur*, S.289 ~ S.290 ティリッヒ著作集第七巻 白水社 p. 282~ p. 283

(1986年1月26日)